

平成 22 年 6 月 7 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006 年～2009 年
 課題番号：18520627
 研究課題名（和文） 東アジアの水産資源や漁場利用慣行に関する比較研究—民俗知モデル構築をめざして—
 研究課題名（英文） Comparative Study about the Marine Resources and the Fishing Ground Use Custom of the East Asia: For the Folk Intellect Model Construction
 研究代表者 李 善愛（II Sun-Ae）
 宮崎公立大学・人文学部・国際文化学科・教授
 研究者番号：90305863

研究成果の概要（和文）：本研究は、日韓両国のアマ（海士・海女）の地域別、年齢別、漁業活動について比較考察することで、東アジア沿岸地域の持続可能な資源管理や漁場利用のための民俗知モデル構築を試みた。

研究成果の概要（英文）：This study compared fishery activity with area, age and sex of the Ama (men divers / women divers) of the Japan and Korea, to try the folk intellect model construction for the sustainable resources management and fishing ground use of the East Asia coastal area.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,100,000	0	1,100,000
2007 年度	800,000	240,000	1,040,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,500,000	720,000	4,220,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：生活・生態研究

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本海や東シナ海沿岸に面している地域は、古くから交流が盛んに行われたところとして東アジア地域の海人文化を理解するうえで重要な地域である。

(2) 近代化や合理化を最優先とする中央政府の政策により、長年の経験や智恵の積み重ねにより表れる地域漁民の多様な民俗知は

あまり注目されてこなかった。

(3) 開発による漁場面積や漁獲物の減少、高齢化や後継者不足、安価な外国産水産物輸入が急増し、水産資源利用問題は村レベルから世界的なレベルまで拡大してきている。

2. 研究の目的

(1) 日韓両国の地域別アマ（海女・海士）の

漁業と生活について社会・経済、宗教、生態との関係から総合的にみる。

(2) 日韓両国の水産資源と漁場利用慣行について地域別「民俗知」の特徴を明らかにする。

(3) 東アジア沿岸地域に共通する持続可能な資源管理や漁場利用のための民俗知モデル構築を試みたい。

3. 研究の方法

平成 18 年度から 21 年度まで、対馬海流域、東シナ海流域、環シナ海流域に分けて主に現地における聞き取り調査を中心に行った。

4. 研究成果

本研究は日本と韓国両地域におけるアマ（海女・海士）の水産資源と漁場利用慣行について比較研究したものとしてまとめると以下の通りである。

(1) 日韓アマ（海女・海士）の地域別特徴

日本の潜水漁者は男性の海士と女性の海女両方が携わっているが、海士は全体数の 7 割弱を、海女は 3 割強を占めている。

①日本のアマ（海女・海士）の地理的分布

日本でもっともアマの数が多い地域は太平洋沿岸の東北地域で全体アマ数の 32% を占める。次は日本海沿岸の対馬海流域で 28%、その次は日本海沿岸の東北地域は 22% で、太平洋沿岸の中部以南地域は 18% でもっともアマの数が少ないところである。県別にみると青森県が 20% で全体アマ数の中でもっとも多く、次は岩手県が 11%、長崎県が 10% で多い。その次は石川、長崎、徳島県はそれぞれ 9% をしめている。

地域別海士の数が多いところは青森県で、海女はいない。とくに東北地域は長男だけ漁場利用権を相続して新入者を増

やさない。一方、海女の数をもっとも多い地域は石川県で、海女数の約 1 割が海士である。その次は山口県でアマ数の約 4 割が海女である（図 1）。このように地域全体からみると海士は太平洋沿岸の東北地域がもっとも多く、海女は日本海沿岸東北地域がもっとも多い。しかし、海女がはるかに多いむらであっても最近は新しい海士の参入が増え、海女村が海士村に変わっているところも多い。このように潜水漁に男性が多く参加したしたのは、捕獲対象物の経済価値が高いのもあるが、ウェットスーツが導入されたためである。

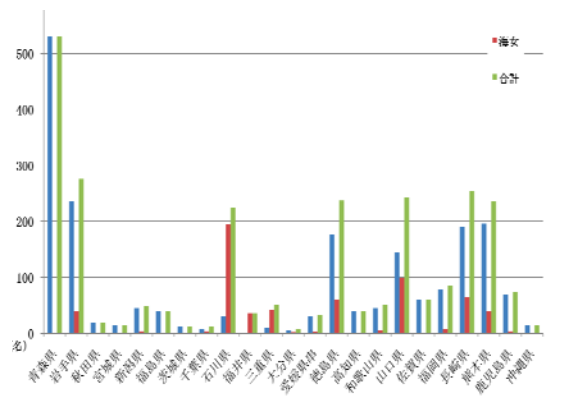


図 1 日本の海士・海女の地域別分布図

②韓国の海女の地域別分布

韓国の潜水漁はほとんど女性によって行われている。その名称は海女（ヘニョ）という。最近、一部の地域で男性も潜水漁に参加しているが、極僅かな人数である。

韓国海女は 2008 年現在、全体海女数の約 87% (6,482 名) が南海岸に分布し、11% (810 名) が東海岸、残り 2% (183 名) が西海岸に分布している。とくに全体海女数の 7 割弱が済州島に分布している。朝鮮半島の近年における海女の分布は、19 世紀末から始まった済州島海女の出稼ぎによる影響もあり、韓国沿岸地域の男性は潜水器漁に携わってもなぜか素潜り漁にはまったくかかわってこなかった。これは、素潜り漁は 1980 年代まで

濟州島海女によって行われていたのもあり、女性たちの漁として認識していたためであると思われる。最近では海女の後継者がほとんどいなく、男性たちが1人あるいは夫婦でアクアランクを背負ったり、コンプレッサーを利用したりして村人の暗黙の了解で、合法的ではない漁法を行われていて資源枯渇問題や資源利用法の問題で地域民間の争いの火種になっている。

(2) 日韓アマ（海女・海士）の年齢別特徴

①日本のアマ（海女・海士）の年齢別分布

日本のアマ（海女・海士）の2009年現在の年齢別分布をみると50代が全体アマ数の25%を占めてもっとも多く、その次は60代と40代が20%、70代は14%、30代12%、20代7%、80代2%であるが、10代がもっとも少ない。

②韓国の海女の年齢別分布

韓国海女の年齢は60代が43%で最も多く、次が70代で21%、40代18%、50代14%名、30代4%の順だけである（図2）。

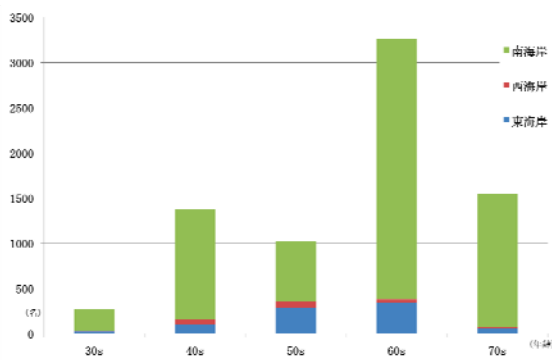


図2 韓国海女の地域別・年齢別分布

このように日本のアマの年齢は10代から80代まで幅広い年齢層のアマが存在するが、韓国の海女は30代から70代まで存在し、海女の年齢層が狭い。また、日本のアマは50代がもっとも多いが、韓国の海女は60代が

もっとも多く、韓国の海女が高齢化と後継者問題が深刻である（図3）。

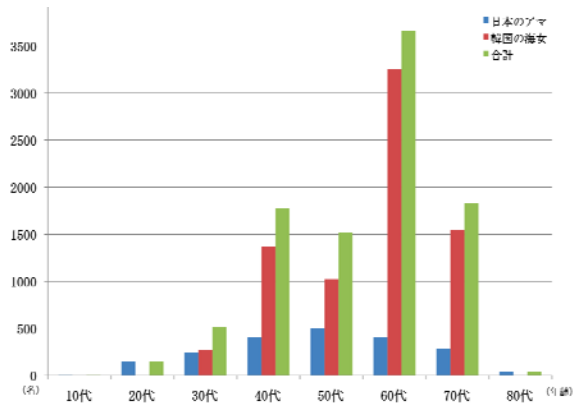


図3 日韓海士・海女の年齢別分布

(3) 日韓海士・海女の漁業活動の特徴

①日本のアマ（海士・海女）の漁業活動

日本のアマ（海士・海女）の操業方法は漁場まで船で移動するフナト、フンドウを持って深いところへ潜るフンドウ、漁場まで泳いで行って操業するオカトの3つに大きく分けられる。

アマの捕獲対象物は、日本の東北沿岸地域はエゾアワビ、エゾムラサキウニが主であり、エゾアワビは、香港、台湾などへ乾鮑として古くから輸出されてきてその経済的価値も高いが、世界経済変動に大きく左右される。他にアワビ、ウニ類などがあるが、海藻類は経済的価値が低いため海士はあまりとらないが、海女がよくとっている。一方、熊本地域は、他の地域ではとらないガンカゼが海士たちの主な捕獲対象物となっている。海士はほとんど一人で船を利用して漁をするのが多い。一方、海女は夫婦、兄弟などの家族か5、6人は共同で運賃を負担して漁をする。また、海女は専業者が多いが、海士は専業者よりは兼業者がはるかに多い。

②韓国の海女の漁業活動

韓国の南海岸はリアス式海岸が発達して

水産資源が豊富な良い漁場が広い。一方、東海岸は岩礁性海岸が発達しているが、水深が深い。また、西海岸は干潟海岸として岩礁性海岸が発達していないため漁場が狭い。そのため、地域別海女の操業形態も異なっている。南海岸は広範囲の漁場を船で移動して操業し、東海岸は地先の漁場まで泳いで行って操業する。西海岸も船で移動し操業するが、中には砂浜を岩場に変えてそこに養殖をするので漁場まで泳いで行くところもある。海女の主な捕獲物は、商品価値の高いアワビとワカメである。ウニは日本への輸出ができなくなって国内販売市場開拓を模索している。海女は地域や捕獲物の生態によって日雇い潜水漁もするが、ほとんど潜水漁を専業としている。

しかし、日韓両国のアマ（海士・海女）の共通した問題は、乱獲などによる資源枯渇もあるが、潜水漁者の高齢化、後継者不足、密漁などの問題で悩まされている。

このように日韓両国におけるアマ（海士・海女）の漁業活動は、自然環境や社会、経済、文化的な背景によって資源利用は大きく地域別、性別、漁法別違いや多様性が顕著に見られる。また、日本には素潜りによる潜水漁を男女ともに参加しているが、韓国は女性だけに参加している。

日本に海士が多いのは、潜水漁に対する性別の位置づけが無く、長男に漁場利用権が相続され、新しい参入者を認めないで資源管理を行っていることと、他の漁業や出稼ぎなどと併行しながら市場の値段によって潜水漁を行うことができるためであると思われる。一方、日本海に多く見られる海女村の特徴は、まずは資源が豊富な漁場に恵まれていて、短期間だけ操業期間を設けて漁をしていることと、操業形態が複数あり、夫婦あるいは家族などで操業して村民が資源を管理してい

るためであると思われる。しかし、韓国海女の操業形態は素潜りだけで捕獲対象物の種類によって個人あるいは共同で素潜り漁をしている。貝類などは個人で操業するが、ワカメ漁は漁場の立地条件によって少々違いはあるが、基本的に共同で採取と分配をしている。

以上からみると、東アジア沿岸地域における持続可能な資源管理や漁場利用のための民俗知モデルは、地域民が置かれている多様な地域的特徴に合わせて自律的に管理、運営することができるよう、政府はバックアップすることである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計8件)

- ①李善愛、「韓国における海洋・水産教育の現状と問題点」、『人と海洋の共生をめざして150人のオピニオンⅢ』、2007、pp. 278-279。
- ②李善愛、「地域文化の生成過程-鯨とのかかわりをとおして-(1)」『宮崎公立大学人文学部紀要』14-1、2007、pp. 35-52。
- ③李善愛、「鯨と関わる韓国地域文化：蔚山市長生浦村調査事例を中心に」『立教大学日本学研究所年報』6、2007、pp. 121-142。
- ④李善愛、「韓国セマングム干潟の干拓事業と漁民の生活戦略」『宮崎大学人文学部紀要』15-1、2008、pp. 15-28。
- ⑤李善愛、「近代化と対馬海流域アマ（海士・海女）の漁業戦略」『宮崎大学人文学部紀要』15-1、2008、pp. 29-46。
- ⑥李善愛、「鯨を食べる文化：浦項から釜山まで」『立教大学日本学研究所年報』7、2008、pp. 106-113。
- ⑦李善愛、「韓国蔚山湾地域の植民地経験-鯨との関わりをとおして-」『日本社会文学』第31号、査読有、2010、pp. 13-21。
- ⑧李善愛、「日本東北地域アマ（海女・海士）

の水産資源利用形態（1）」『宮崎公立大学人文学部紀要』17-1、2010、pp. 9-27。

〔学会等発表〕（計13件）

- ①李善愛、「地域文化の形成と変容：蔚山長生浦鯨村調査事例を中心に」、第13回蔚山鯨祭記念学術シンポジウム、2007年4月20日、韓国国立水産科学院鯨研究所。
- ②李善愛、「磯資源利用と漁業協同組合の役割と機能について」、東アジア・東南アジア地域におけるコミュニティの政治人類学研究会、2007年5月12日、国立民族学博物館。
- ③李善愛、「鯨を食べる文化-浦項から釜山まで」、立教大学国際シンポジウム、2007年7月14日、立教大学。
- ④李善愛、「対馬海流域アマ（海士・海女）の漁業活動-水産資源の持続的利用のための可能性を探る-」、第49回地域漁業学会、2007年10月27日、宮崎公立大学。
- ⑤II Sun-ae, 'Henyō in Korea and Ama in Japan: changing lives of the Divers Fishermen at the Tsushima Current Coast', The Scientific Committee of the 31st International Geographical Congress, the 14th August 2008, Le Kram Congress and Exhibition Centre, Tunis.
- ⑥李善愛、「内陸開発と干潟地域の生態変化-南海岸泗川湾地域の事例をとおして」、河口沿岸研究会、2008年3月15日、三重大学。
- ⑦李善愛、「観光資源としての地域文化-長生浦鯨祭とベトナム鯨信仰との比較をとおして」第14回蔚山鯨祭記念学術シンポジウム、2008年5月2日、韓国国立水産科学院鯨研究所。
- ⑧李善愛、「朝鮮半島から戦争のテキストを読む：蔚山捕鯨村の事例を中心に」、日本社会文学会、2008年11月9日、宮崎公立大学。
- ⑨李善愛、「東アジア沿岸地域の海洋資源利用に関する生態人類学的研究」、韓国文化人

類学会、2008年11月15日、ソウル大学。

⑩李善愛、「東アジア海域世界における韓国の海女たち」、海女フォーラム、2009年10月3日、鳥羽市海の博物館。

⑪李善愛、「韓国のワカメ漁場利用の多様性」、日本地理学会、2009年10月25日、琉球大学。

⑫李善愛、「韓国東南海岸地域の鯨食文化」、捕鯨文化に関する実践人類学的研究会、2009年12月19日、国立民族学博物館。

⑬II Sun-ae, 'Saemangeum Tidal Flat Development and Living Strategy of Fishermen', Asian Model for Sustainable Resource Use in Estuarine and Coastal Regions Workshop, the 6th March 2010, Inha University, Korea.

〔図書〕（計2件）

①李善愛（訳）、新しい人びと、『自然は誰のものなのか：共有に関する歴史・生態人類学的研究』、2007年、249p。

②李善愛編、ヒダカ印刷、『宮崎産水産物の流通と消費の現状と課題』、2008年、pp. 1-167。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

李 善愛 (II Sun-Ae)

宮崎公立大学・人文学部・国際文化学科・教授

研究者番号：90305863